

本川達雄さん

[生物学者]



「正しい」って一体何？

哲学的な思索に目覚めた小学校時代

学者の父と元小学校教師の母との間に生まれた私は、「先生とは偉い存在である」という教えのもとに育ちました。母は、「先生を遊び友達だと思ってしまうから」という理由で、私を幼稚園に通わせなかったほどです。そのため小学校入学後、周りの子どもたちが幼稚園の延長で先生にまわりつく傍ら、私は母の言いつけを守り、ひたすらかしこまっていました。

小学校低学年といえば、なんでも元気いっぱいな時期。答えがわかっているようにそうでなからうが、みんな無邪気に「ハイ！ハイ！」と手を挙げます。ですが私は、そうではありませんでした。「『正しい』とはどういうことだろう？」と考えてしまったのです。

「自分が正しいと思うことは発表するのに値するのか。だって正しいという保証はないから。では、先生が思うことが正しいのか。先生の正しさよりもっと偉い正しさがあるのではないか。それがわからないまま、なんでも適当に手を挙げるのは自分の美学に合わない。だったら手を挙げない」——こんな、物事を斜に構えてみる、ちょっと格好つけた子どもでした。

純粹に学問ができる分野が

生物学だった

私の著作は国語の教科書にも多く掲載されていて入試にも出ますが、作者

である私も満点は取れませんね。出題者が正しいと思うことが国語の問題では正解であり、著者の思っていることが（たとえ本当の正解だとしても）正解にはなりません。国語のそういう所がひっかかって、一つの答えがきちんと出る理系に進学しました。

当時は高度経済成長期で、数学ができる子は工学部へ、そうでない子は商学部や法学部に行くという流れがありました。私は、世の中にすぐに貢献できることよりも、少し距離を置いた学問をやりたいかった。それで理学部を選びました。

とはいえ、文学も嫌いではありません。高校時代は、ポケットに詩集を入れて持ち歩いていました。けれども、文学は心のことばかり扱っていますし、当時、理学部の花形だった「素粒子で全てがわかる」という考え方も、どちらも偏っていると思いました。「偏らずに、真ん中ぐらいで世界を考えたい。それには、無生物と人間の中間である生物を対象にするのがよいのではないか」と考えました。でも生き物好きではありません。

必要以上の「楽しさ」は不要 授業の本質に戻ろう

今の子どもたちは、生まれた時からテレビを見て育っています。そのため、テレビの、手を替え品を替え「楽しませる」演出にすっかり慣れきってしまっています。

こういうものが「当たり前」になった今、一人の先生が45分間、教科書を

もとに教える授業は、子どもには苦痛に感じられるでしょう。しかし、かしまって授業を聞くことも、子どもにとっては必要な経験です。

今のように、子どもがすぐ楽しめるものに慣らされた環境で授業をやるのは大変だと思います。しかし、テレビのように、全てを面白くやる必要はありません。楽しくなくても好きでなくても大切な事を身に付けさせるのが教育の大きな役目です。ですが、できるだけわかりやすく伝えるべきでしょう。

価値観は多様でも

全てが「人それぞれ」ではない

最初の話に戻りますが、「正しさ」は、その人の立場や価値観、時代背景によって様々で、その場、その時の「正しさ」を判断し、それに合わせていけるようになるのが大人になることでしょう。

ですが、絶対的な真理もあるということも、頭の片隅に置いておく必要があります。なんでも「人それぞれだから」で片づけていては、やりたい放題になってしまいます。

家の中では正しさの権化みたいな母でしたが、「お天道様が見ていらっしゃる」が口癖で、自分よりもっと大きなものの前ではへりくだっていました。こんな母のおかげで、自分の思う正しさ、自分が身を置いているところの正しさ、そしてより高い正しさと、各段階の正しさに敬意を払う習慣がもてたことに感謝しています。

PROFILE

もとかわたつお ● 1948年仙台生まれ。東京大学理学部生物学科（動物学）卒業。理学博士。東京大学助手、琉球大学助教授等を経て、1991年から東京工業大学教授を務める。2014年3月に退官後は小学校でのボランティア出前授業に励んでいる。専門は、棘皮動物（ナマコ、ウニ、ヒトデ、ウミユリ）の硬さの変わる結合組織の研究やサイズの生物学の研究で、「ゾウの時間ネズミの時間」（中公新書）をはじめ、生物学的世界観をわかりやすく説く著書が多数ある。

複数の物の見方をもつとともに、
絶対の真理へのまなざしも大事